

医療は誰のもの

地域医療構想を考える

23

「ここは、どこ？」。イマー症と診断された。足腰はいたって丈夫。これまでも買い物帰りの自転車に乘ったまま行方不明になり、たまたま衛星利用測位システム(GPS)を備えた見守り携帯を持っていたため、30分先の西伯郡内で見つかったこともある。

実は昭子さんは真誠会グループが運営し、「通い」「泊まり」「訪問」サービ

スなどを提供する看護小規模多機能型居宅介護施設の利用者。境港市内で保護された日も通っていた。

認知症初期集中支援チームを編成し、早期発見や早期対応に注力する小田院長は「職員が自宅に送り届けた後とはいえ、うちの利用

第3部 有床診療所の今

増える認知症の対応探る

この間、真誠会セントラルクリニック(米子市河崎、19床)の小田貢院長(73)は関係者と情報交換。真誠会グループの職員約30人が自

主的に捜索に加わり、自宅周辺の夜道を駆け回っていた。

家族3人暮らしの昭子さんは5年ほど前にアルツハ



行方が分からなくなった認知症高齢者の対応を話し合う関係者

認知症行方不明者数 県長寿社会課が市町村からの報告を基に集計した人数は、2015年度が35人。内訳は、30人は24時間以内に無事保護▽2人は24時間以上だったが無事保護▽3人は死亡。季節に合わない服装や不安そうにしている人を見掛けたら、「何かお困りですか」と優しく声掛け。行方不明の場合には家族だけで探そうとせず、最寄りの警察や市町村に連絡してと呼び掛けている。

クリック

和町)。地区の10自治会を束ねる連合会の田辺忠雄と探しようがない。日ごろ会長ら関係者20人が顔と問題提起。家族の了解を得て個人情報を集積し、有事の際や見守り活動に活用する仕組みづくりの必要性を強調した。

米子署員や認知症サポーター、ケアハウス管理者も加わった議論は個人情報取り扱いと、医療・福祉施設と地域の連携の在り方に集中した。

地域全体で助け合う

1時間に及んだ議論は、どう認知症時代に向き合うのかという重い課題を突き付けた。米子市内6カ所で開催された。米子市55人の認知症ケア専門士を抱える真誠会グループ。小田院長は、こう力説する。

「認知症になって地域の人たちと一緒に暮らすためには、地域全体で助け合う優しい社会が必要だ」

超高齢化と人口減少の加速を背景に、地域医療構想が見据える2025年問題は、医福連携に加え地域との絆を求めている。

元民生委員の義妹は「自宅や介護施設に閉じ込めたい」対応を求め、田辺会長は「ケース・バイ・ケース」(同市は「ケース・バイ・ケース」)

徘徊への対応課題

者。気温の低い深夜、車の行き交う路上。命の危険にさらされていた」と言う。

団塊世代が75歳以上になる2025年には、認知症の人が全国で約700万人

に膨らむ。高齢者5人に1人という高率は「認知症で関係を深める和地区も安心して暮らせる地域社会」の早期実現を促す。

その鍵を握る一つが、徘徊への対応だ。昭子さんの事例に危機感を抱いた小田院長は、米子市内で最も高

齢化が進み、地域ケア会議がまま外出。しかも夜間の捜索になったため、地域住民への告知や協力は見送られた。

元民生委員の義妹は「自宅や介護施設に閉じ込めたい」対応を求め、田辺会長は「ケース・バイ・ケース」(同市は「ケース・バイ・ケース」)

毎週土曜掲載